

Title	労働者意識についての若干の問題 (上) : 四工場の調査を素材として
Sub Title	Problems on the Labour consciousness : research for the four factories
Author	青沼, 吉松
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1954
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.47, No.4 (1954. 4) ,p.401(71)- 410(80)
JaLC DOI	10.14991/001.19540401-0071
Abstract	
Notes	資料
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19540401-0071">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19540401-0071</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

Theorie des Preises. 1936. SS. 247-52.) 彼は利潤をミスが賃銀のおしきげによつてうまれるとみていたと解し、したがつて生産物價値の超過によつて利潤の發生は説明されていないと解するが、この場合、ミスにおける労働賃銀の範式がみおとされてゐる。

カウラは支配労働説にミスが立脚して、賃銀のみならず、利潤、地代もまた労働によつて尺度されるというところから、ミスは利潤によつて剰餘價值説的に解してゐるとみてゐる。(R. Kautsky: Die geschichtliche Entwicklung der modernen Werttheorien. 1906. SS. 138-9.) しかし、支配労働説に立脚するがぎり、直接的には、ミスの解する如く讓渡利潤説とみる方が正しい。テュルジョンはミスにおける投下労働説と支配労働説との區別のいぎを理解せず、更に價値の規定と尺度、價値の内在的尺度と外在的尺度との區別のいぎを理解しないで、安易にミスは資本主義社會についても價値法則の妥當性を信じてゐたとみてゐるが、内在的な理解ではない。(C. Turgeon et C.H. Turgeon: La Valeur d'après les Economistes anglais et français. 1921. pp. 62-8.)

(註四八) Theorien. Bd. I. S. 136, 140-3, 161-2. 譯、一四八—九、一五三—五、一六二頁。Bd. II. Tl. I. S. 116, 120-2.

譯、一二四、一三〇—一頁。

(註四九) Wealth. Vol. I. p. 56. 譯、第一分冊、一二二頁。その批判——Theorien. Bd. II. Tl. I. S. 129. 譯、一二六—七頁。

(註五〇) その批判——Kapital. Bd. II. SS. 385-6, 389. 譯、第七分冊、四九九—五〇〇、五〇四頁。Bd. III. SS. 908-9, 918; 923-34. 譯、第三分冊、一二〇二、一二一四—五、一二二一—三四頁。

—一九五四・二・一九・稿

### 資料

#### 労働者意識についての若干の問題(上)

—四工場の調査を素材として—

青 沼 吉 松

本論文は四工場即ち川崎市のI自動車、東京都内のY毛織、M市のN工具、K戸車の諸工場を対象とした調査を素材としてゐる。(1)これらの工場は各種の面で相違点をもつており、かつ工場内部においても職員—工員、労働幹部—平労働員等の相違がある。これらと比較しながら、労働者意識の若干の問題をとりあげようとするのが、本論文の意圖である。労働者意識のいかなる面を、どのような形で問題にしようとしているか、この研究がいかなる見透し或は假説をもつて着手されたかについては後述に委ねる。なお、この調査は質問紙法を軸として、面接法によつてそれを補強するという形でなされた。(2)

(1) I自動車とY毛織との調査は、昭和二十七年、日本における社會緊張の研究「産業労働班(班長尾高邦雄教授)の二部」として昭和二十八年三月に實施された。これらの調査は三枝幹夫(労働科學研究所)、北川隆吉(東京大學)兩氏及び筆者

の協同によつてなされた。質問紙の配付、蒐集等については三枝、北川兩氏はY毛織を、筆者はI自動車を分擔した。この協同研究の成果の概要は報告されたが、本論文はこの報告を單に敷衍したのではなく、筆者の見解を強く出し、多少とも獨自な立場から作成した。従つて分析未熟の責は筆者のみが負わねばならない。かかる形で資料の利用を許諾された協同研究者に謝する。なお、I自動車の調査には本塾大學院學生竹内恒宣、丹下利邦兩君の協力をえた。

新潟縣M市のN工具とK戸車の調査は、昭和二十八年文部省科學研究助成補助金をえてなされた「三條市の社會的研究」の一部として實施された。これらの調査は本塾大學院學生小林康志君の協力をえて、昭和二十八年九月に行われた。

(2) Iの従業員約四千のうち三三三を、Yのそれ約一千四百のうち三二六を、Nのそれ約六〇のうち四五を、Kのそれ約百のうち四七を抽出し、それらについて質問紙調査を行った。標本の抽出法はランダムであり、回収率はIでは八割、その他では九割程度であつた。なお本調査に入る前に、Iで約百名を抽出して、豫備調査をなした。

面接は質問項目の検討、量的に表現されたものをいかに解釋するか等に重點を置いてなされた。面接者の数は各工場で異なるが、数名乃至二〇名程度である。

労働者についての社會心理的問題は、彼らが置かれて

労働者意識についての若干の問題(上)

七一 (四〇一)

會的環境の分析を前提として、取扱われなくてはならないことはいうまでもない。(南博「社會心理學」五二―三頁)かくて本節ではまず地域、會社、組合、次に各工場の労働力構成にふれる。

A

東京、川崎については説明を省略しようが、M市については、それが必要であろう。M市の主要産業は金物業であり、それは問屋制家内工業を中核として展開されている。工場形態をとるものは少く、その有力なものは金物業以外の業種で發展している。M市では、工場は戦前には殆どみられなかつたが、戦時及び戦後に幾多の工場が發生した。しかしそれらはこの町の産業形態の基調を變える程の力をもつていないようだ。(M市の詳細については、拙稿「産業と地域社會」三田學會雜誌昭和二八年五月號参照)このおくれた産業形態において、M市は東京、川崎とは對照的である。

I及びYはそれぞれの業種における有力會社である。Iは重工業に、Yは輕工業に屬することからして、各種の相違が生じてくる。N、Kはいずれも中小企業であり、ここに大企業對中小企業の問題が出てくる。Nは嚴密な規格を要求される小工具を作っている近代工場(1)であり、「金物の町」たるM市では異質的分子である。これに對してKはその本質においてマニユファクチュア的である。(2)従つて兩者をとることによつて、M市における工場の二類型を比較しよう。M市工場の多くは零

細金物業製造業者から生長したもので、會社形態をとつていても實質は個人經營である。これに應じて、労働者も職人的性格を多分にもつている。(3)Kもこの例外ではない。ところがNは戦時中某飛行機會社の下請工場として、地元外の資本を導入して設立された。戦後この下請關係を脱し、若干の變遷の後、現在の状態になつた。かくてNは所謂會社らしい雰囲気を持ち、その労働者も近代色を帯びている。M市工場の典型は兩者のうちではKに求められる。(4)

I労働組は全自の一環をなし、總評左派と稱され、活潑な組合活動を行つている。Y労働組は全織の一環をなす。全織のなかでは蠶糸に次いで、羊毛が強いといわれているが、Yはそのうちでも左であり、全織左派と認められている。M市でも終戦直後には幾つかの労働組ができたが、これらのうち現在まで残つていゝるものは殆どない。Nには、M市工場では例外的に労働組が存在する。しかしN労働組は上部組織としては、微力な地域の連合團體をもつにすぎない。KではK會と稱するもの(5)はあるが、労働組はない。N労働組では二、三〇歳臺の中堅工員が労働幹部となつている。年長の、職長クラスの工員は自ら労働幹部とはならないが、若いものやることを温い眼でみている。又N經營者特に若い實務に携わる重役は、労働組に對して相當の理解を示しているようだ。K會の幹部は會社の職階制を反映しているが、その運営に對し平會員の間にはかなりの不満がある。(6)しかしこの不満は行動となつては、現れてきていない。(7)

(1)近代工場は機械の採用によつて特色づけられる。それは家内工業を驅逐して、産業形態を根本的に變革し、近代的勞資關係の基盤を構築する。M市では、この近代工場は金物業以外の業種でのみ發展しているから、それは金物業における家内工業的生産様式を、直接的には陳腐なものとしていない。M市の主要産業は未だ産業革命以前の形態にとどまつている。(2)Kは双物工場に比べれば、近代工場に近い性格をもつている。戸車工場は好況時に際しては、零細戸車製造業者との競争に直面するが、不況時には零細業者を壓倒して生きのびることが出来る。双物工場は戦時中の要請乃至戦後のブームによつて生じたものであり、不況時にはむしろ零細業者に壓迫される。

なお、マニユと近代工場との差異は機械の導入の有無にかかるが、機械を社會的概念として把握する限り、近代工場の本質を機械に體化された固定資本の重みで、家内工業的生産様式を陳腐ならしめることに求めよう。

(3)職人的労働者はマニユに對應するものであり、前期的性格をもつ。彼らはその熟練によつて、資本に對する發言力をもつている。又マニユは家内工業と並存するから、彼らは獨立する機會を全く失つてはいない。このように、彼らは個人的に資本に對抗する力をもつので、彼らの生活によつて勞組は必須なものとは未だなつていない。かつ雇主との間には親方―徒弟的な温情關係が残存している。Kの鑄物工はかかる

労働者意識についての若干の問題(上)

職人的労働者と規定しよう。

(4)M市工場のより典型的なものとしては、金物業に屬する双物工場をあげることができよう。しかしそれは極めて小規模で、十數人位が限度であり、しかも最近の不況では、影が薄い。

(5)K會の最大の行事は、春秋二回の温泉旅行である。K會の會長は社長であり、事務が副會長、幹部工員が理事になつている。K會は明らかに勞資協調的な親睦機關である。

(6)K會の幹部と平會員との關係についての質問に答えたものは、四割弱にすぎないが、兩者の關係が「うまくいつていゝる」と答えたものは、その二割にとどまる。ところがN労働組の同様な關係について問うと、解答者九六%のうち六割強が「うまくいつていゝる」と答えている。

(7)労働組は必要であるが、「できそうにもない」という意見のうちに、この事態が看取される。K労働者意識の前期性は労働組の必要性を否認する形ではなく、それができそうにもないという意見に現れている。

B

I、Yの労働力構成は性別、年齢別にみて、全く對照的である。Yでは、女子が労働力の量的主軸であり、年齢的にはその過半が二〇歳以下である。Iでは、女子は極めて僅少であり、しかも年齢的には殆どが二一歳以上である。(1)

このことから當然豫想されるように、I労働者の大部分

は世帯主であるが、Yのその過半は未婚の、生家との繋りを断ち切れない女子労働者である。(2) Y女子労働者のこの非獨立性は、生家との間の送金關係において現れる。これをIのそれと比較すると、相違は歴然としている。Yでは、解答者のうち三八%が送金關係を肯定しているが、Iでは、それは一六%にすぎない。(3) 更にこの性格は失業した場合に、彼らがとうとうとしている方策においても出てくる。Yでは、解答者のうち四一%が、Iでは、そのたつた四%が「生家に歸ろうと思う」と答えている。(4) Yでの、この四一%の實数は百名であり、送金關係を肯定したものの實數六四名を遙にこえている。従つてたとえ送金關係がなくとも、失業した場合の行動において生家との家族的繋りを表明しているものが、Yでは相當にいる。Iでは、これが逆に、送金關係を肯定したものの實數は二六名、失業したら「生家に歸ろうと思う」と答えたもののそれは一四名となつてゐる。又I労働者は歸れる生家をもつてゐるものがより少ないのみならず、もつていても歸りたくないものの比率がより高い。(5) 彼らは失業という困難に直面した場合、これを家族主義的方向ではなく、近代社會の原理に従つて解決しようとしている。或はそうすることを餘儀なくされてゐる。(6)

家計補助的であろうと、自活的であろうと、Y女子労働者の大多數にとつて、彼らの職場は結婚前の一時的なものにしかすぎない。元來、彼らの多くは彼らの職場によつて永続的な獨立

の生計を営もうと思つてゐない。ところが、I労働者の大部分は現に獨立している。現在をうでないものも、將來はそのような方向に進もうと心掛けてゐる。このことはY労働者の過半の勤続年數が三年以下であるのに、I労働者の約九割のそれが四年以上であるという事實に、適確に表現されている。(7) かかる相違は兩者の入社動機と無關係ではなからう。Yにおいては入社動機として「家においても仕方がないから」「都會にあこがれて」特に前者が極めて多く、四割近くを占めてゐる。Y女子労働力が、家庭の貧困を背景とはするが、遊休労働力の動員という形で集められるという事情を、これは物語つてゐる。これに反して、「この仕事が好きだから」という積極的動機による就職はIの方が壓倒的に多い。(8) このことはそこで一生をすごそうとするI労働者の氣組を示しているのではないか。

N、Kの労働力構成を性別、年齢別にみると、Nでは二一乃至三〇歳の男子労働者の比率が高いのに反して、Kでは女子及び二〇歳以下男子労働者の比率が高い。この兩者を合したものはNでは三三%、Kでは六三%になる。即ちこの兩者と二一歳以上の男子労働者との割合は、NとKでは大體逆になる。(9) Kでは、機械部門は主に未成年男子労働者によつて、組立部門は殆ど女子労働者によつて擔當されている。(10) Nでは、仕上の一部及び包装が女子によつてなされてゐる以外には、Kで見られるような形での、作業部門別の労働力の特長な配置は行わ

れてゐない。

女子労働者の多くにとつて、職場は一時的な意味しかもたないことは、兩者に大體共通してゐるようだが、Kでは若干の例外がある。(11) 未成年男子労働者は、Nでは永続的職場を求め、傾向があるのに反して、Kでは他の有利な職場を見出す間の一時的腰掛主義に立脚してゐる。(12) ここでは、彼らは熟練(13)の獲得による地位の昇進も、勞組の力によるその保證もえられないから、腰掛主義はむしろ當然の歸結であらう。この傾向と女子労働者が多いという事情が、K労働者の勤続年數を短縮させてゐる。(14) かくてNでは世帯主がより多く存在し、Kでは非獨立労働者の比率が高くなる。(15) 更にNではKと異り、未成年男子労働者がそこで獨立化する傾向を濃厚にもつ。これらの點において兩者の間には、IとYとの間にみられたのと類似の相違がある。

賃銀額についてみると、Iがずばぬけて高く、その約九割が一萬圓をこえているが、他の三工場、特にN、Kではそれは極く少數にすぎない。この相違は労働力の性別、年齢別の違ひを考慮に入れても大きすぎる。これに反して、五千圓以下の比率はIでは零であるのに、Yでは約四割、Nでは約三割、Kでは四割強である。(16) この主な原因としては、女子及び未成年男子労働者の比率があげられる。(17) これら低賃銀労働者に對して、Yではこの種工場に共通にみられる福利施設の裏付けがあるが、N、Kではこのような補償も殆ど存在しない。N、Kに

労働者意識についての若干の問題(上)

七五 (四〇五)

おいては、汽車通勤が多く、Nでは四四%、Kでは五一%がそうである。しかもこの大部分は五千圓以下のものである。即ちNでは七二%、Kでは六三%に當る。従つて汽車通勤者の多くは、女子或は未成年男子である。このように汽車通勤が多いことは、これら工場はその低賃銀の故に、地元からは労働者を探用することが困難であることを示している。M市は「鍛冶の町」であるが、鍛冶屋の子は親の跡をつぐので、工場へ入ることは稀である。その他の求職者もより有利な近代工場へ入ろうとし、或は東京等への轉出を企てる。従つて低賃銀の故に、工場は労働力の不足に悩んでゐる。かくて過剰人口が失業者としてではなく、低賃銀労働者として現象するという典型的現象が現象する。M市の特産たる金物は低廉労働力を基礎として、はじめて全國的販路を確保しているという事態と、これは表裏をなしてゐる。この事實を反映して、Iでは多くのものが失業したら、「どうしようもない」と答えているのに、N、Kでは「他の工場で就職口をみつけれらる」と樂觀してゐる。(18)

IとYについて成年男子労働者の賃銀を比較しても、Iの方が高い。KはNに比べて、平均賃銀が低いのみならず、賃銀額の上下に集中がみられ、中間が少い。これはKでは、特に厚遇されてゐる一部の従業員(19)と不遇の多數があることを意味する。鑄物工を除けば、Kの成年男子の賃銀は、Nのそれよりも相當に低い。Kでは、年功による上昇という原理が作用してゐるが、Kの機械、組立部門では、それが殆ど働いてゐない。か

くて賃銀額についての満足度即ち賃銀と仕事とのつり合いについての意見をみると、YはIよりも、NはKよりも不満を多く表明している。(20)この不満は賃銀額が高ければ、當然少くなるが、労働者意識の高低とも関係しているようである。換言すれば、不満は賃銀の高低に反比例し、労働者意識には比例するようである。

最後に労働者の生家の住所及び父の職業についてみる。Yでは東京出身者が半数に近く、Iの京濱全體の出身者を合したもののより多い。(21)彼らの父の職業の大部分は農業以外であると想像される。(22)従つて彼らは農村のおくれを工場生活にもち込むことは少い。I労働者には、地方から出てきたものがむしろ多いが、彼らの多くは既に生家との家族主義的絆を切斷して、獨立した世帯を形成している。N、Kの労働者はM市及びその周邊農村のもので占められている。父の職業はKでは、農業及び職人が目立つており、Nでは工員の比率が相對的に多い。(24)

性別	男子	女子	N
	I	九三	三
Y	二九	六七	四

数字は百分率を示す。  
以下特別の附言のない場合は同様である。解答欄のNは不解答者を意味する。

年令別	一八	一九	二〇	二一	二二	二三	二四	二五	二六	二七	二八	二九	三〇	三一	三二	三三	三四	三五	三六	三七	三八	三九	四〇	四一	四二	四三	四四	四五	四六	四七	四八	四九	五〇	五一	N
-----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	---

(5) 歸れる生家があるか否かの間に答えた労働者のうち、「ある」と答えた労働者の比率は、Iでは四一%、Yでは七一%である。更に「ある」ものなかで、失業したら「歸ろうと思う」と答えた労働者の比率は、Iでは一三%にすぎないのに、Yでは六三%にもぼつている。

(6) 近代社會は小家族體制に合致し、家族主義體制とは相容れなく。(Kingsley Davis, Human Society, pp. 418-429) 家族主義的救済を拒否して、問題を社會的次元で解決しようとするI労働者の態度は近代の代といえる。

わが國の失業人口が、大衆の間の家族主義によつて潜在化してしまひ、社會問題として現象しない傾向が指摘されている。(例えば、藤林敬三「わが社會保障制度と生活保障體制」三田學會雜誌昭和二年九月號二五—二八頁)この傾向は一般的には妥當するであろうが、I労働者について、生家との繋りに關する限りは、その濃厚には現れていない。未婚のY女子労働者が失業したら、「生家に歸ろうと思う」と答えたからとて、彼らを前期的だといえるかどうか疑問である。何故ならば、彼らと生家との繋りは小家族的なものであるからだ。しかし世帯主の場合には、生家との繋りはそのようなものではなくつているだろうから、同じ解答が前期的なものだと判斷される。

(7) 勤 績 年 數  
労働者意識についての若干の問題(上)

N	I	三一	一六	六一	四二	二一	一八	二〇	一六	一一
七	七	六	二	二	七	七	六	六	六	四

(2) 世帯主か否かをみると、

Y	I	七二	二三	二二	五
二二	六八	九			

Yの世帯主の殆どが男子であることは、いうまでもない。

(3) 生家との送金關係

Y	I	四	一七	四三	四九
三一	二〇	三三	三五	四四	

大部分が「している」であるが、特にYで「されている」が若干あるのは、生家の裕福さと同時に低賃銀をも示すことになる。

(4) 失業したら、どうするかを問うと、

Y	I	三	四	三	三
三一	二〇	二四	三九	二四	二五

Y	I	一	一	三	四	一	一	四	八
一五	三七	一五	二二	四〇	一九	一	四	八	五

Yでの短い勤績年數は女子を、長いのは男子を代表している。

(8) 入社 の 動 機

Y	I	一	四	二	一	一	一	五
一八	二四	三八	八	〇	一	二	一	五

(9) N、Kの性別、年令別の労働力構成

K	N	七	〇	三	〇	四
八七	九	〇	四			

K	N	二七	二五	二二	四	四	二	四	七	〇	一
三六	一五	一三	四	二	九	二	一	九	二	一	九

性別、年齢別を綜合して、簡単な表を作ると、

K	N	女子		男子	
		一〇	二三	二〇歳—二一歳	六七
三〇	三三	三七	三七		

(10) Kの作業部門別の労働力配置

性別	作業別					N	計
	女性	男性	鑄物	機械	組立		
女	二二	三〇	二〇	二一	二	六	七〇
男	四九	一五	一五	二	三一		

(11) 女子が擔當する戸車の組立は手工的になされ、出来高に應じて賃銀が支拂われる。従つて仕事に慣れることによつてある程度の賃銀額を受取りうる。Nでは女子の最高給が月四千圓であるのに、Kでは五千圓のものが三名いる。このよ

うな事情からして、勤続する女子労働者が若干出てくる。

(12) 將來の希望について、NとKとを比較すると、

K	N	ここに勤めていた	自營したい	他の会社に移りたい	N
		七一	九	二	一八
四九	二二	一五	一五	三一	

Nでは引續いて勤務を希望するものが、解答者のうち九割に

近いが、Kではそれは六割強である。

なお、Kでは「自營したい」の比率が高いことに氣付く。これはK労働者の職人氣質を示しているようだ。この氣質はM市の「辨當もち」を輕蔑する傳統によつて加連される。しかし更に失業したら「自營できるか」と尋ねると、「自營したい」と答えた七名のうち一名が「できる」と答えているにすぎない。従つて自營の志向は現實性を伴つていないといえな

い。職人氣質は單なる心理的なものにはすぎないかもしれぬが、この心理が彼らの行動を規定することは否めない。

(13) 「註11」における「仕事に慣れる」というのは、低度ながら熟練を意味しているともいえる。しかしこの仕事はそれ自體としては單純であり、速度を問題としないならば、誰にでもできる。従つて高度の熟練の介入する餘地はない。高度の熟練とは、仕事の遂行において労働者がイニシヤティブをとることを内容としている。例えば、刃物鍛冶が鐵をどのよう

(14) 勤続年數

K	N	一—二	三—四	五—六	七—八	九—一〇	一一—一二	N
		二八	九	四	二	四	四	五三
一六	三一	四	二	四	三	四		

Kでは解答者のうち約六割は一年以下、Nでは二四%がそれであるにすぎない。

(15) 世帯主か否かをみると、

K	N	世帯主	否
		三六	六四
二三	七七		

(16) 四工場の賃銀額 單位千圓

K	N	Y	I	一三三・一五五・一八六・一〇一	一〇一・一五・一〇一	一〇一・一〇一	N
				一四九〇	三二〇	二二二	九
二七	三二	二二	二	一八	五	二	
三二	二〇	三〇	四	六	二	〇	
二〇	二〇	二〇	二	二	二	二	

平均賃銀は、

I 一五・六千圓  
Y 六・二  
N 六・二  
K 六・〇

なお、M市労働者の賃銀水準は全國的水準の半分にもみない。近代工場で九千圓、金物工場で六千圓程度である。Nの平均賃銀は近代工場のそれより遙かに低く、金物工場のそれ

労働者意識についての若干の問題(上)

(17) Nでは二〇歳以下男子及び女子は例外なく五千圓以下である。Kでは未成年男子労働者のうち三名は五千圓をこえて

いる。逆に、成年男子で五千圓以下は、Nで二名、Kで三名いる。成年男子の賃額はNで二七名、Kで一五名であるが、この例外の比重はKでは更に大きくなる。これら二つの例外がKにおいて多いのは、そこでは賃銀計算に出来高制が重要な役割を演じているからである。これに反してNでは年功賃銀決定に大きな意味をもつ。Iでは組合の力で推進されて、この年功制が賃銀算定に極めて大きな比重をもつようになっている。

(18) 失業したら、どうするかを尋ねると、

K	N	どうしようもない	家の仕事を手傳う	他の工場で見つける	自營できる	N
		一五	九	五	九	一一
六	一三	六	二	二	一七	

Nでは「どうしようもない」が多く、「家の仕事を手傳う」が少いのは、その労働者が獨立化していることを示す。なお、Nには農家出身のものが、比較的少いことも考慮しなくてはならない。

(19) K鑄物工の平均賃銀は八・九千圓であり、その分布は次の通りである。賃銀額の單位は千圓、人数は實數である。

賃銀額	五	七	八	一〇	一三	N	計
人数	一	二	三	二	三	三	一〇

Kで一・二萬圓といつてゐるものが三名いるか、それらのうち二名は鑄物、一名は事務である。鑄物部門は「註13」でいう高度の熟練を若干必要とする。他の部門では代替をみつかることは容易であるが、この部門ではそうはいかない。鑄物工は数は多くはないが、この工場での労働力の質的主軸をなす。彼らは事務の一部と共に厚遇されている。

(20) 賃銀と仕事とのつり合いを尋ねると、

	つり合つて いる	まあまあだ い	つり合つて ない	N
I	八	四二	四二	八
Y	二	三〇	五六	一一
N	一一	四〇	三六	一三
K	二三	四六	一三	一八

全體的にみて、賃銀額について不満が相當強く表明されている。例外はKでみられるが、これはK労働者の意識の低さによつて解釋されるようだ。何故ならば、Kは四工場のうちで平均賃銀が最低であるからだ。勿論この問題を解釋する場合には、労働者が置かれている社會的環境特に京濱とM市との賃銀水準の差、性的、年令的相違等が考慮にいれられる。

(21) 生家の住所

東京	京濱	關東	東北	北陸	山靜	その他	N
Y	I	二四	一三	三五	五	一四	〇
四	五	一	二四	五	〇	二	一
五	一	二四	五	〇	二	五	一
二	三	一	二	〇	一	五	二
三	二	一	二	〇	一	五	二

(22) I、Y労働者の父の職業

農林	漁	工	鑛	商	公務	交通	無職	N
Y	I	一五	〇	〇	一	四	六	一
一	五	〇	五	〇	八	九	〇	一
一	五	〇	五	〇	八	九	〇	一
一	五	〇	五	〇	八	九	〇	一
一	五	〇	五	〇	八	九	〇	一

Yでは、不解答者が半数に近く、はつきりした断定は下しえないが、農業の比重がそう大きくないことだけはいえる。このことはYで東京出身者が多いことと對應する。

(23) N、K労働者の父の職業

農	工員	職人	勤人	交通	商	日雇	無職	N
K	N	一五	一五	七	七	〇	二	二
二	七	六	一三	六	一	一	四	二
二	七	六	一三	六	一	一	四	二
二	七	六	一三	六	一	一	四	二
二	七	六	一三	六	一	一	四	二

後記 續稿は本誌七月號に掲載される豫定である。

『コーデックス・ラウレス・ハメンシス』  
におけるマンキピア

宇尾野 久

コーデックス・ラウレス・ハメンシスの成立とその内容についてはすでに上原専祿教授の統一的な紹介と、批判が行われており、カール・グレックナーの新版(一九二九—三六年)に對する適切な論評を下されている。したがつて吾々はその基盤に立つて作業することの學恩にめぐまれている。

K・グレックナーは右の第一卷で「手寫とその利用の歴史」について「HeppenheinとFelsbergerの境界争いで一四七三年にロルシュでコーデックスが発見された。……それによるとロルシュ修道院の創建は、主の降誕後七六四年」とのべているがこの文書は同卷「年代記及び手寫本」(二六五—六頁)の冒頭に De fundatione laureshamensis monasterii.

Anno dominice incarnationis septingentesimo  
sexagesimo quarto, [764].....

と掲げられているので、ロルシュ文書の年代をそれ以上過去に遡らしめることは困難と思われる。尙この『ロルシュ修道院創建記』には「祝福されしラインパーグスの伯カンコールが、ルペルト伯の寡婦にて宗教心厚く神に歸依せる彼の母ウィリス

『コーデックス・ラウレス・ハメンシス』におけるマンキピア

ウィンダとともに、はじめアルテンミュンスターと呼ばれた insula のロルシュ修道院をそこに修道職の司掌奉仕に當るメツツの大司教、仁慈なるルーテガングスに寄進せり」とみえる以上この年代上の疑義は問題の餘地を残さぬように思われる。勿論中世における文書改竄が問題になるとしてもロルシュ文書所收の他の傍證が嚴存するからである。したがつて「ロルシュ文書がドイツ最古の文書だ」ということは問題だと思われる。<sup>(5)</sup> 例えば前掲の創建文書についてピンの治世の十二年(七六四年)にハーゲンハイムの寄進が行われた文書(Reg. 2)が載せられているのでその全文を邦語に移す迄もなく年代的な疑は起らない。ただ同文書ではウイスゴツツ河上流、ラインパーグス内のラウレス・ハムの地に聖堂が創建される以前にすでにルードガングスが布教活動をこの地で行つていたことが確認される。

しかし乍らロルシュ文書の三八三六通にのぼる内容が示すように聖堂の政治、經濟生活はきわめて廣汎となり、その所料の占める廣袤もライン、ネッカー、ニッダ、ライン流域に亘つて

ラウレス・ハムのコーデックスのなかでは「Mancipia」という語が頻繁にみうけられる。前掲ハーゲンハイムの寄進文書の中でも「farinarium」(emeratia farina)や「litus」